

剣道における勝負の構造について
～ 剣の理法より ～

有馬 佳代*, 前阪 茂樹**, 大坪 壽**

Structure of victory or defeat in Kendo
—Fragmentation between Professional and Academic Disciplines—

Kayo ARIMA*, Shigeki MAESAKA** and Hisashi OTSUBO**

Abstract

We cannot consider Kendo without being aware of victory or defeat, because Kendo is originally based on the skills and the view of life which our precedents mastered in situations of life and death.

The main purpose of this paper is to describe in detail and clarify the victory or defeat structure, which is the core of Kendo, from the viewpoint of the logic of swords. The logic of swords consists of three elements; 身法【shin-po】(the way to use our bodies rationally in matches), 刀法【to-ho】(the way to use a sword rationally), and 心法【shin-po】(the way to use our mind effectively).

To be brief, mastering the logic of swords is combining these three elements perfectly. In order to gain a victory, it is very important to deepen the all-around abilities covering these three elements. Furthermore, 心法【shin-po】, what the mind and spirit should be, is an effective factor in victory or defeat. Naturally, above-mentioned things should also be emphasized in order to improve skills.

KEY WORDS: *the logic of swords*, 身法【shin-po】, 刀法【to-ho】, 心法【shin-po】

はじめに

現代剣道は、競技性を前面に出した試合至上主義あるいは、求道性強調の二極分化または世の中の例にたがわず、高齢化、情報化、国際化などの社会の変容に伴い、剣道も幼少年・中・高年・女子・学校・職域・国際剣道などにおいて、指向の多様

化現象を呈し、重要な時期といえる昨今である。

しかし、剣道は元来、先人が生死の場で作ったあげた技術・人生観に立脚していることから、勝負をぬきにした剣道はありえない。この剣道の核ともいべき勝負の構造を明らかにし、その構造に内在する様々な要素がどのような意味をもち、修練にどのように関わっているかを明らかにする

* 鹿屋体育大学研究生 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

** 鹿屋体育大学武道講座

ことは真の剣道実践に不可欠といえる。

換言すると、上述のことは剣道の理念「剣の理法の修練による人間形成の道である」⁷⁾に即した剣道実践であり、その剣の理法つまり、やり直しがかかないという勝負の核を前提に理法即ち身法・刀法・心法の三即一の総合力の深化が勝負を決することを意味する。

従って、剣道における勝負の構造を解明することは、勝負論のみならず上達論を明らかにし、さらに剣道の修練のあり方や方向性を示唆し、現代剣道のもつ多様化現象などの深層を理解し、問題を解決する手立てとなる。

研究方法

本研究は、流派剣道の伝書や剣道試合・審判規則、剣道試合・審判細則、その他の剣道関係の著書などの文献より、剣道の勝負・修練に関わる資料を収集し、それらを「剣の理法」即ち、身法・刀法・心法に分類し、勝負論的視点からそれぞれの要素を明らかにし、その構造を考察するものである。

結果と考察

1 勝負における身法

(1) 身法概念

道元は正法眼蔵・身心学道で「身学道といふは、身にて学道するなり、赤肉の学道なり身は学道よりきたり、学道よりきたるは、ともに身なり、尽十方界、これ個の真実人体なり、生死去来、真実人体なり。」¹¹⁾と述べている。「生死去来真実人体」というのは、生まれ来り死んで去ることが、まことの人間のありようだということである。ここにいる生死は、凡夫にとっては流転する境地であり、大聖にとっては解脱の境地であるが、いまいうところの生死はこの凡夫と聖者の区別を超えたものであって、尽十方界即ち全宇宙を体とする様な身になってはじめて真実体とするのである。釈尊の「天上天下唯我独尊」¹²⁾にある様に天地のあるじとなる構えこそ姿勢を正すことの究極の意味である。

上述の内容を剣道では姿勢・構えをさし、この姿勢・構えが正しくなければいくら精神を鍛えよ

うとしても無駄であり、真の中心を得る姿勢・構えによってはじめて生命エネルギーの原理と統合できるとしている。この身体と精神を宿す生命エネルギーの原理をどんな動きの中にも実現できるようにすることが究極の目的である。

(2) 勝負論的視点

身法は、規則的用語である適法な姿勢のことをいう。剣道は相手を打突して勝ちを制するが、そのためにはこの適法な姿勢を四方・八方いずれかの方向にも自由自在に移行することができる体さばきとともに、千変万化のわざを適切に行う姿勢であり構えでなくてはならない。

しかし、技を修得し、それをどう使うかがわからなければ技を修得したとはいえない。技をどう使うかは、とくに間合い、拍子を極めることが大切である。

剣道の間合いは、相手との距離、打突するとき、心の虚実とを総称したものであり、自分と相手との打突の心理的、物理的あるいは空間的隔たり、時間的隔たりを含むと同時に緊張関係の変化ということの意味する。間合いの種類は、一足一刀の間、近間、遠間があり、勝負における間合いのとり方は、自分に有利で相手には不利の間合いを取ることが重要である。また、間合いを取るときは相手の技能力や戦法などは予知しておくことも大切である。しかし、まずは自分の間合い即ち、打ち間を知ることが第一である。このように間合いは体さばきで行い、構え及び竹刀の操作も重要な要素となり、これらの要素に気力が伴い適切に融合して効果的な間合いをとることができるのである。この間合いの修得は、さまざまな剣風の相手と稽古を行い、自分の間合いを修得することであり、勝負には不可欠である。

次に、拍子は辞書によると「楽曲のリズムの根底をなす、周期的な小区分」¹⁴⁾と記されているが、これは音楽のみの専有物ではない。

剣道における拍子は、身体の調整、呼吸、緩急、強弱、間等によって組み立てられる。これらがうまく構成されてはじめて、剣道の太刀や体さばきなどの動作が瞬時に行われる。

呼吸の拍子は、己れの心を冷静にし、打つべき機会をとられるのに必要であり、間の拍子は、近間・一足一刀の間・遠間の拍子の構成・緩急・強弱の拍子をいい、筋の収縮の組合せが合理的に行われて、はじめて能率的な動作ができる。

例えば、面を打つ場合は、各自の呼吸と間の拍子が、噛み合っこそ立派な面打ちができる。滑らかな動作が剣道の麗しさにもつながっているものであり、この拍子の研究・修練こそ、勝負や上達の秘訣である。

さらに、宮本武蔵の「五輪書」³では、「水の巻」に「一、敵を打つに一拍子の打の事。敵を打拍子に、一拍子といひて、敵我あたるほどくらいを得て、敵のわきまへぬうちを心に得て、我身もうごかさず心も付ず、いかにもはやく直に打拍子也。敵の太刀、ひかんはづさん、うたんと思心のなきうちを打拍子は一拍子也。此拍子能ならひ得て、間の拍子をはやく打事鍛錬すべし。」とあり、心の持ち方によって拍子は変わった形で現われるため、一拍子の打ちが基本であり、この一拍子が分かってくると全体の拍子も分かるとしている。拍子は、自分自身の鍛錬により得られるものであり、間合いと同様、勝負にとってかなり重要な要素で、工夫鍛錬が大切である。

従って、間合いと拍子は相対する二者の動きが、空間的、時間的に変化していく勝負の過程のなかで生まれ、この変動的内容を読みとり、しかも、わざを出す決定的瞬間を察知することが間合い、拍子を使いこなすこととなり、このことが直感的・感性的技術観の根底をなすもので、勝負の最も重要な要素となる。

2 勝負における刀法

(1) 刀法の概念

古来、日本では、みつのたま 節霊の剣（上古の神剣の名を意味する）の法則によってつくられた長刀が鹿島神宮の神宝となり、刀は鏡や玉と同じく神霊視された。

また、刀を鍛える士は、精進潔斎して心に「¹国土安穩」「²怨敵退散」「³五穀豊饒」などを念じて、神とともに槌をふるう形式を重んじている。

時代が下って二本差の侍は、「刀は武士の魂」という精神的支柱を刀に求めた。

大刀は殿さまのために「忠ならずばこれを抜かず、孝にあらざればこれを抜かず」で、めったに抜けない規制があった。小刀は、もしも過ちをおかして切腹するときは、これを使うという「自戒の刀」だった。

こうした高い理念が日本刀には受け継がれ、それが尊ばれてきた。抜かずとも、腰に帯びただけで、身の引き締まるような“威力”を示す象徴的な意味も含まれていたのである。「竹刀を刀と思え」というのは、精神を鍛えるために刀の威力を忘れてはならないということであり、刀の運用を前提としている。

(2) 勝負論的視点

刀法とは正確な打突のことをいい、また技であり、変化でもある。剣道をする上で刀法を無視することは、棒振りでも剣道ではない。刀法に適うことが重要である。その刀法は、竹刀の持ち方や運用のなかで自己流ではなく古来より伝承されてきた内容即ちわざの取り組みが必要である。

以上のことを正確に実践するためには、伝承形態として重要である「形」からはいるのが上達も早く、上述の刀法を身につける第一歩である。しかし、現在は形修練の象徴である日本剣道形は、審査の時だけの「形」修練とし、普段の取り組みが希薄になっている傾向がある。従って、現代剣道は踏み込んで遠間から打突でき勝負の速さを求めた結果「勝つための当てっこ」とまでいわれ、剣道の本質である打つ、切るということから外れてしまった勝負を呈している風潮がある。しかし上述のように真の剣道の勝負観は刃筋を前提にしたものでなければならない。「形」による修行こそ刀法を身につける重要な方法であり、自己流に落ち入らない正しいわざの伝承の上からも重要な意味をもつ。

元来剣道において技術・技能というような運動学的な概念規定ではなく、人間の全ての活動、精神的活動を含めたものとして事、業、術、技などの字で表され、わざと読んでいく。

また、剣道は「⁴⁾心気力の一致」が本質とされる。その特性は本来、刀を使うことにはじまり、どんな状況の変化や相手の動きに対しても決して動揺しない心と刀の操法、それにふさわしい構えが一致してはじめて本来の剣道になり、それが現代の竹刀剣道の有効打突につながり一本になるのである。

勝負における有効打突については、全日本剣道連盟「剣道試合・審判規則」⁷⁾「同細則」の関連事項によると、次のように規定している。

「第12条 有効打突は、充実した氣勢、適正な姿勢をもって竹刀の打突で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする。

(審判細則として)

第10条 規則第12条の「刃筋正しく」とは、竹刀の打突方向と刃部の向きが同一方向である場合とする。

第11条 次の場合は有効とすることができる。

1. 竹刀を落とした者に、直ちに加えた打突。
2. 一方が、場外に出ると同時に加えた打突。
3. 倒れた者に直ちに加えた打突。

第12条 次の場合は、有効打突としない。

1. 有効打突が、両者同時にあった場合。(相打ち)
2. 被打突者の剣先が相手の上体前面に付いてその氣勢・姿勢が充実していると判断した場合。

(竹刀の打突部)

第13条 竹刀の打突部は、物打を中心とした刃部(弦の反対側)とする。

(打突部位)

第14条 打突部位は、次のとおりとする。

1. 面部(正面および左右面)
2. 小手部(右小手および左小手)
3. 胴部(右胴および左胴)
4. 突部(突き垂れ)

(審判細則として)

第13条 面部、小手部は、次のとおりとする。

- 1 面部のうち左右面は、こめかみ部以上。
- 2 小手部は、中段の構えの右小手(左手前の左小手)および中段以外の構えなどのときの左小

手、または右小手。」とあり、剣道の特徴が理解できる。また有効打突については、適正な姿勢・充実した氣勢という、測定基準のない要素を加味し、総合判定される。それは、古来の剣術・真剣による斬り合いや形剣道を基盤とし、質的には気剣体一致を前提として有効打突とするということを考えているからである。刃筋を正しく、残心あるものという条件も同じ理由による。

3 勝負における心法

(1) 心法の概念

心法とは、心であり心の触手である気をいう。

気とは元来、中国哲学の伝統的・普遍的な存在論上の概念であった。諸子百家の時代、儒学や道家・法家・墨家・兵家・陰陽家等、九流十家の思想家・学派があり気論を展開してきた。

最も古い法家の管子は内業篇で、「気とは宇宙に充滿する微物質(エネルギー)ととらえ気が天地の間に流動し、五穀や、星となるさまを描いている。」¹²⁾ また、心術下篇で「気は身の充なり」とし、これは気とは天地に遍歴しまた人身に充滿するものとしている。さらに内業篇で、「心気、気意」の語を使い、気が心とある関係をもつものであることを示している。

また、心気は呼吸との関係が深く、古来より呼吸の工夫がなされ、剣道の実践に不可欠であるとしてきた。

(2) 勝負論的視点

心法とは、心のあり方であり相手に打つべき機会を与えないだけでなく、相手の動きがよく見え打つべき機会を逃さず打突できるような澄み切った心が必要である。これは意識的に打突の機会や間合いなどを捉えようとして捉えられるものではなく、無意識的に勝負の中に没入することで初めて心に映しとることができる。すなわち、これが、「平常心」あるいは「不動心」⁵⁾「明鏡止水」で剣道における理想的な精神状態である。古来、以上のような境地に到達できるよう修練してきた。これが「無」の状態といい無念無想の境地が最も理想的な精神状態といえるし、呼吸のあり方そのものといえる。

逆に、勝ちたい、立派な試合をしたい、良い技を使いたいその他の諸々の欲望は、当然心に浮かぶものであり、それらの心はすべて心を乱し、妨害となり、自在な技の支障となる。また、呼吸の乱れとなる。

つまり、無念無想とは敵もなく我もなくつまり無心になることで、事理を離れ、勝負を離れ、生死の観念を離れた空の状態。この境地に辿り着けば、活気が全身に満ち、すべての技は必要に応じて自在に出るのである「明鏡止水」「⁶⁾懸待一致」「心気力一致」等はすべて無念無想から生じるといえる。しかし、この境地を悟ろうとするのは至難である。生涯脇目も振らず、主一無適の精神で修行に励もうとも、簡単に辿り着けるものではない。無心になろうとして何も考えないとすれば、考えまいと考える時点で無心にはなれない。無心になろうと考えることが既に雑念であるといえるからである。しかしながら、結局は主一無適の精神を以て、日頃の絶えない修練・鍛錬による他はない。しかし、その修行段階の試合で相手に対するとき、ただその相手を倒さねば止まぬ旺盛な気合いに撤すること、つまりその相手を倒そうとする一念が無念無想というべきものであり、一心不乱になることで無念無想の心境となることができるのである。

以上のように剣道における精神性は具体的には、真剣勝負、生と死を前提にし、仮に試し合うなかでこれらの勝負体験を内省していくところに意義があり、攻め・気攻め・心に響く一本という勝負の妙味を生み出し、気の勝負の方向をめざすところが剣道の勝負の要である。

4 まとめ

上述の通り、剣の理法を身法・刀法・心法に分類し、剣道における勝負の構造について考察してきた。

身法は、適正な姿勢のことをいい、構えが堅実で理合に適い、剣先に狂いのない状態、体さばきの総合をいう。このような状態にないときは相手のこの状態を崩すこともできないし、打突しても、無理な技で、効果もないことから工夫が大切であ

る。

刀法は正確な打突即ち、竹刀の運用とわざのことをいい、形から入ると刀法が身につく正確な打突ができ上達の早道である。また、打突の基本的要素がより多く含まれている面打ちを行うことで他の技も修得できるし、正確な打突を身につけられる。

心法は、曇りのないころ、充実した氣勢をいう。つまり刀剣のもつ意義が生死をかけ、やり直しのきかないことを意味することから、それに耐え、打ち破るころのあり方や氣勢が必要である。

つまり、理法の特質は心・気が元で技術や身体に必然的に関わりをもつという身法・刀法又は技法となるのである。これらの三即一の総合力が、心気力一致であり剣道の修練の目的である。

従って、現代剣道の勝負の中核である有効打突をいかにとるかの課題は、日々理に適った即ち、三即一の剣道修行が大切であり、この心気力一致の打突が有効打突の質につながるものである。

以上、剣の理法のそれぞれの内容と特質をまとめたが、剣術は、刀剣を用いて戦闘に勝つ、そのための技術修得であったし、現代剣道においても勝負をぬきにしては考えられない。

そこで、上述の理法を剣道の勝負の構造の視点から要約すると、剣道はまず基本や形である身体的技術を修得し、その技術を勝負という場できかに使いこなせるかが勝負の分かれ目となる。これを著者は、勝負的技術とする。その勝負的技術を発揮することは、相互の攻防の中でとくに、間合い、拍子による変動性即ち、力動的緊張関係を読みとり、瞬時に有効打突をとることで勝負を決することとなる。これらの勝負の間合い、拍子の力動的緊張関係を読みとり、破るものは冷静なころと気攻めが深層に存在し、このことが質的には決定的な勝負の要となる。

即ち、前述したとおり身法の要である姿勢、構え、そして間合い、拍子の直観的・感性的技術観とそれらに関する刀法の刃筋、竹刀の運用、わざなどは全てころと気が関与し、また勝負に必要な全ての打突行動、攻め、余勢、残心の循環行動の側面からも呼吸との関連が深い心気が、勝負の

基本的構造の根底をなしており、勝負を規定し、本質的な位置を占めているといえる。

以上、これらの勝負の構造を前提にした剣道の取り組みは勝負論のみならず、上達・指導論の上からも重要なことであり、日頃の稽古においても身体に触られたら生命が無い、真剣勝負であるという充実し、緊張した気合いをもって稽古に励むことが、その在り方や人間形成にも大きく影響すると考えられる。

註

- 1) 国土安穩 国全体がおさまって、やすらかでおだやかなこと。国土安全を意味する。
- 2) 怨敵退散 降伏(ごうぶく)の祈願などに用いる語で、うらみある敵を退散させること。
- 3) 五穀豊饒 米、麦、キビ、アワ、豆の五種類の穀物が、豊にみること。
- 4) 心気力一致 相手の動静を窺い、技の総てを司る心の働き、自己の意志を決する根元等を言い、気とは気合い、氣勢、氣力を言い、力とは体の運用、技の動作等を言う。この三つが一致することによって、技は思いのままに出され、試合に勝ち、然も剣道を楽しく行われる体用一致ともいう。
- 5) 明鏡止水 己れの心を明らかな鏡、止める水のように澄みきってれば、相手の隙が自然に、己れの心に映って、相手の方から打突の機会を示してくれる其処を間髪をいれない気合いで打突の技をもって勝を制する。
- 6) 懸待一致 攻防において懸かるところに待つ心、待つところに懸る心が必要で、心の隙をつくらないことをいう。

参考・引用文献

1. 三橋秀三：「剣道」, (株)大修館書店, 東京, 1979年, pp, 48-49, pp, 282-292
2. 重岡 昇：「全解 日本剣道形」, (株)スキージャーナル, 東京, 1982年, pp5-14
3. 宮本武蔵：「五輪書」, 徳間書店, 東京, 1963年, p, 99
4. 高野佐三郎：「剣道」, 島津書房, 東京, 1915年, pp, 176-201
5. 高野佐三郎：「剣道遺稿集」, (株)スキージャーナル, 東京, 1989年, pp 138-164
6. 國分國友：「剣道本質論」, 鹿屋体育大学剣道論研究室, 1994年, pp, 55-61
7. 全日本剣道連盟：「剣道試合・審判規則」, 1995年, pp, 6-8
8. 中林信二：「武道のすすめ」, 島津書房, 東京, 1994年, pp, 204-211
9. 一川格治：「二天一流の剣と五輪の書」, 土屋書房刊, 東京, 1984年, pp, 89-90, p, 101
10. 渡辺一郎：「武道文化の研究」, 第一書房, 東京, 1995年, pp, 380-381
11. 鏡島元隆：「道元 正法眼蔵・永平広録」, (株)講談社, 東京, 1994年, pp, 109-110
12. 小野決精, 他二名著：「氣の思想」, 東京大学出版会, 東京, 1978年, pp, 108-116, pp, 189-192
13. 大森曹玄：「剣と禅」, 春秋社, 東京, 1966年, pp, 236-244
14. 相賀徹夫：「現代国語例解辞典」, (株)小学館, 東京, 1989年, pp, 1052-1053